



▲常設型資源ごみ回収拠点施設の完成イメージ図。平成24年春のオープンを目指し、平成23年度に着手する

毎月第3日曜日に、恵那総合庁舎駐車場で開かれている「日曜リサイクル広場」を、常設型資源ごみ回収拠点施設として整備します。広場を運営している市民エコ会議と、協働で施設を検討。平成24年春にオープンする予定です。

この施設では、普段、私たちの身近にある不用品を資源としてリサイクルしたり、再利用したりします。そして、地球温暖化防止のために、環境への負荷が少ない循環型社会の拠点となることが期待されます。

□問い合わせ 環境課(内線183)

日曜リサイクル広場を常設型に 協働で資源ごみを毎日回収



この施設を、ごみの減量と環境問題を考える総合的な拠点にして、3Rを推進し環境に優しい生活様式をいろいろな角度から提案します。

けます。常設型のため、この特性を生かして、現在の日曜リサイクル広場で回収している品目以上に、多様な品目の回収が可能となります。

生ごみを各家庭で堆肥化して処理する方法の普及啓発活動や、環境学習、各種講座なども計画しています。

さらに、市民の皆さんから持ち込まれた不用品を展示販売するコーナーや、情報交換の場の提供など、多彩な活動を展開していきます。また、太陽光発電システムなど、自然エネルギーを活用した総合的な環境施設を目指します。

3Rを推進する拠点に

市は、平成24年春のオープンを目指して、来年度、市消防防災センター南側の阿木川沿いに、常設型資源ごみ回収拠点施設を整備します。

施設では、ごみの減量と身近にある資源の有効活用や環境問題全般の情報提供と体験の場を提供します。

建物は、木造平屋建て。資源回収を行う資源回収スペースや、各種講座などを開催する多目的スペース、事務室、トイレなどを設置します。

この施設には、新聞や雑誌、段ボールなどの古紙や古着、飲料缶など資源として再生利用が可能なるものを、持ち込むことができます。ほぼ毎日開ける予定です。市民の皆さんは都合の良いときに利用していただ

※3R=次の3つの頭文字を採って3Rという。①Reduce・リデュース（発生抑制=ごみを減らす暮らしづくり）②Reuse・リユース（繰返し使う）、③Recycle・リサイクル（再生利用）



▲日曜リサイクル広場で配布している「リサイくん通信」

【市民エコ会議】
平成18年、市内の環境活動団体や環境に関心のある個人が参加するまちづくり市民協会環境部会が「恵那市のごみの現状」の出前講座を開催。ごみ処理費用に年間10億円以上を費やし、資源も無駄にしていることを学んだ。「自分たちで何かできることはないか」と、環境課職員を交えて定期的な話し合いをする中で、「日曜リサイクル広場」を開催することになりました。

日曜リサイクル広場を開催するために、平成4年からリサイクル活動をしている「もの」と心を大切にする会」と、環境部会に参加する個人で「市民エコ会議」を設立。現在の主な活動は、日曜リサイクル広場やフリーマーケットの開催、EMぼかしやダンボールコンポストの普及などです。

日曜リサイクル広場の回収量と利用実績

品 目	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
紙類	41.1ト	75.7ト	72.9ト	(57.6ト)
古着	7.4ト	19.5ト	16.5ト	(15.3ト)
飲料缶	0.2ト	0.8ト	1.2ト	(0.8ト)
瓶類	0.8ト	2.3ト	2.5ト	(2.7ト)
プラスチック類	1.0ト	6.3ト	8.2ト	(7.7ト)
食用廃油	0.2ト	0.3ト	0.6ト	(0.4ト)
合計	50.7ト	104.9ト	101.9ト	(84.5ト)
開催回数	6回	11回	11回	(9回)
利用実績	1,578台	3,700台	3,877台	(3,530台)

※平成19年度は10月から、平成22年度は12月までの実績

た。利用者も増加し、会場が手狭で危険なため、平成20年4月からは、会場を恵那総合庁舎の駐車場へ移転しました。

総合庁舎の駐車場は広く、車での方通行で会場内を進めるため、安全性も向上しました。

一方、車で会場へ行けない方からは、中心市街地での開催を望む声も出ていました。また、野外で行うため、雨天時の開催が困難という課題もあり、過去に数回、天候を理由に中止しました。炎天下の夏場には、スタッフが熱中症になりそうなこと

もありました。

駐車場を利用して行うため、当日の運営や準備、片付けに多くの人員が必要です。人員や車両など、協力企業にも負担が伴います。

【市民の減量意識を高める】

常設型資源ごみ回収拠点施設ができれば、リサイクル広場が、ほぼ毎日開催されるようになり、資源を排出する機会も増えます。分別品目の多様化や回収品の売却益の確保、スタッフの少人数化も期待できます。

市民が、自ら分別して持ち込むことは、ごみの減量意識をつくり出します。直接資源化されるものを回収するため、収集運搬や中間処理のコストが不要です。

単に、資源ごみの回収拠点にとどまらず、リユース品の展示販売や、不用品の需要と供給の情報交換、橋渡しを行い、再利用を促進します。また、環境講座などの開催や生ごみ処理の相談コーナーの開設、ごみ問題の情報などを発信します。

この施設では、市民が主導する、ごみ減量化に向けた、多彩で発展的な活動が期待できます。そして、「循環型社会の形成」と「市民によるまちづくり」を進めるための拠点になります。

▼段ボールコンポスト講座

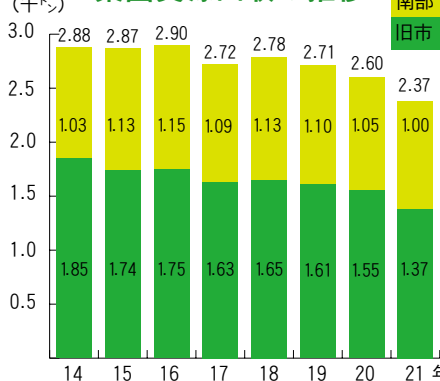


▼毎月第3日曜日に恵那総合庁舎駐車場で開催されている日曜リサイクル広場



▲開設当初は、市役所の駐車場で開催していた

集団資源回収の推移



市は、アルミ缶や瓶、ペットボトルを資源ごみとして自治会などのステーションで回収しています。しかし、新聞や雑誌、段ボールなど、古紙の回収は、小中学校PTAや子ども会の活動に支えられてきました。

最近では、少子化の影響で、集団回収の回収量が減少傾向です。この7年間で約500ト減少しています。集団回収の回数も減少傾向で、資源を排出する機会も減少しています。PTAなどの集団回収だけでは、

集団回収の回収量が減少

リサイクル広場の歩み 経験生かし循環型社会の拠点に

回収頻度や回収品目が十分ではなく、市民から「家の中に新聞紙や雑誌がたまっているが、出す方法がなくて困っている」「休日に持ち込める場所がほしい」などの意見も寄せられています。

こうした課題を解決するため、平成19年度に環境問題に取り組む市民グループと定期的に協議を重ねる中で、市民の利便性の確保とリサイクルの促進、ごみ減量化を図る取り組みとして、資源ごみ拠点回収事業「日曜リサイクル広場」が開設されました。

野外実施に多くの課題が

平成19年10月の第3日曜日に、市役所駐車場で、1回目の日曜リサイクル広場を開催。初回から大変好評で、来場した車両は230台ほど、約9トの回収がありました。

市役所の駐車場は、イベントなどが行われるときは、その駐車場になるため、リサイクル広場を開催するための場所の確保が課題になりました。



▲回収しているプラスチック類



【現在の日曜リサイクル広場】

□とき 毎月第3日曜日午前9時～11時（雨天などで中止の場合は、告知放送でお知らせします）

□ところ 恵那総合庁舎駐車場

□回収品目 古紙、古着、飲料缶、瓶、プラスチック類、食用廃油、バッテリーの7品目、18種類

□主催 市民エコ会議（会員34人）

□協力団体 東栄製紙工業（株）、東海エコシステム（株）、ケイナックリール（株）、アパックス、恵那たんぼぼ作業所、恵那バッテリー電装（株）、岐阜県、恵那市

市民エコ会議（代表・安藤洋子）

TEL 25-2034



常設型施設の在り方と協働を語る

座談会参加者（敬称略）
 安藤洋子（市民工コ会議代表）
 山田憲義（同副代表）
 長谷川美津恵（同常設型施設検討部会長）
 安藤克子（同生ごみ部会長）
 市川その（同広報担当）
 樋田健一（市環境課職員）
 北原茂昭（市まちづくり推進課職員）

日曜リサイクル広場を運営している市民工コ会議は「平成22年度恵那市まちづくり市民活動推進助成事業」の市民提案型協働事業部門で、「常設資源回収ステーションの在り方」を検討してきました。

そこで今回、市民工コ会議とまちづくりを進めるまちづくり推進課、環境課職員で座談会を開催し、日曜リサイクル広場の開設を振り返りながら、常設型資源ごみ回収拠点施設の在り方と協働について話し合いました。

上手に役割分担ができた

「日曜リサイクル広場の開設へ向け、市民団体と企業、行政で計画から進めましたが、会議や準備はうまくできましたか。また開設当時の話を聞かせてください。」

安藤（洋） 環境について、職員と私たちが、互いに議論する中で共通の目標が生まれ、日曜リサイクル広場は誕生しました。市民だけではできなかったことを、市と一緒に話し合い取り組むことで、実現できたと思います。

長谷川 話し合いをする中で、市が乗って来れば、資源回収ならできるだろうと思っていました。職員が協力企業や場所を選定、私たちが、その担い手である人員やボランティアをつくる。上手に役割分担ができました。

市川 業者さんも利益は二の次で協力してくれました。今は、企業も環境問題に配慮しなればいけない時代のため、運が良かったです。

長谷川 市役所駐車場で、広場を開催していた時は大変でした。金曜日の夜まで駐車場にはたくさんの車が



あったので、職員が夜来て綱張りをし、会場を確保してくれました。

樋田 イベントがあれば、当然そちらが優先のため、思うように会場を使えなかったですね。

市川 市民会館のイベントに来た車を、知らずに一生懸命誘導。乗っている人も「何でかしら」みたいなこともありました。

安藤（克） 職員の皆さんも、休日にボランティアで一生懸命動いてくれました。日曜リサイクル広場を開催するようになってから、男性会員ができたことはうれしかったです。

山田 私は、会員から「ちょっと手伝って」と頼まれたことが切っ掛けで参加するようになりました。今後、いろいろな企画や運営をするためには、社会経験が豊富な方に、もっと参加してほしい。団塊の世代が会社勤めを卒業される時代、そういう方たちに参加していただけたらありがたいです。会員を募集しています。

安藤（克） 可児市の拠点回収施設を視察したとき「男性スタッフがいなくて大変」と聞いたが、やってみると、やはり男子がいないとできないと感じました。



改めて感じた需要の多さ

「日曜リサイクル広場の利用状況や利用者の特徴を教えてください。」

安藤（洋） 利用者は、中高年の方が多いと思っていたら、意外と若い人が多いことに驚きました。子ども連れや赤ちゃんを抱いた方、お父さんの参加も多いです。子どもに分別

させている姿を見かけたときは、素晴らしいことだと思いました。若い人が多いことはすごいことです。

市川 昨年12月に実施したアンケートでは「初めて利用する」と答えた方がたくさんいました。日曜リサイクル広場を始めて3年になります。が、利用者がどんどん広がることは、とてもうれしいです。

長谷川 県外ナンバーの車が来たときは、少し驚きました。高齢の親が古紙などを出せないから、子どもや親戚が出しに来るのだと思います。そういうことが何回もありました。1日に何回も同じ人が来たこともありました。アパートとかで、みんな話をして、みんなの分を持って来てくれました。このとき「需要がある」と改めて感じました。



山田 利用状況は、平成19年度は1日当たり平均260台。今は、平均380台。今までの最高は昨年12月の504台です。最近、1日に400台ほどの利用があります。日曜リサイクル広場には、串原や飯地町など遠いところからも来てくれます。市街地へ買い物に来るときに「ちょっとたまったから、ついでに持っていこう」そんな形で、利用していただきたと思っています。



温暖化防止の提案拠点に

「常設型資源ごみ回収拠点施設の在り方をどのように考えますか。」

市川 環境問題はテレビでも頻繁に取り上げられています。小中学校では、積極的に環境教育が行われています。しかし教室だけで学んでは、知識となるだけです。習ったことを、生活の中で実践することが必要です。自分の町で実践できることが大切だと思います。

北原 拠点施設では、環境教育の一環に、社会見学やこの施設で授業などもできるといいですね。

安藤（克） そのことを、すごく期待しています。

長谷川 子どもたちに、3Rの推進をもっと教えていく必要がありますが、あまり機会がありません。三重県桑名市の常設回収施設「クルクル工房」では、学校の新任の先生が研修する講座があります。子どもだけではなく、大人も学ぶことで、ごみを減らす大切さが、もっといろんな層に伝わると思います。

市川 本市は環境先進地に、子どもたちには環境博士になってもらいたいですね。

長谷川 3Rの推進が温暖化防止につながるように、自分たちの生活の方向を見直す必要があります。資源ごみの回収拠点施設にとどまらず、廃棄物の減量と資源の有効活用の情報と体験の場を提供し、環境に優しい生活様式を提案する施設であることが、大切だと思います。



安藤（洋） 可燃ごみはリサイクル広場での資源化と、生ごみのリサイクルで85%も減らせます。ごみ出しは10日に一度で済むし、分別は慣れれば楽しいですよ。

生ごみは自家処理が理想

「生ごみのリサイクルについては、どのように考えていますか。」

安藤（克） 当初は、常設施設で生ごみを回収し、堆肥にしたいと考えていました。しかし自分たちで調べていくうちに、市の地域性やコスト面を考えると、生ごみは自家処理が一番良いということが分かりました。

長谷川 職員は最初から「できない」とは言いませんでした。言わないでくれたことがうれしかったです。

樋田 生ごみは家庭の中で、自分たちでリサイクルが可能。ごみに出さず家庭内で処理していただくのが理想です。行政が、方法やこつ

の普及を直接行うことは難しいです。市民の皆さんが担い手となって広げていただくことが望ましいと思っています。幸い、市内にはこれを担っていただけの方たちがい



います。家庭内処理を進めていくことで、ごみを減らすことができます。

安藤（洋） 常設型資源ごみ回収拠点施設は、いろいろな可能性を秘めています。この施設での取り組みが、市民の皆さんの環境意識の向上につながることを願っています。



▲左から安藤克子さん、長谷川さん、安藤洋子さん、山田さん、市川さん、樋田さん、北原さん。和やかな雰囲気の中で、日曜リサイクル広場の開設を振り返りながら、常設型施設の在り方を語った